

金沢城下における町人の外出行動の空間特性*

Spatial Characteristics of Outdoor Activities in the Castle Town of Kanazawa

馬場先 恵子** 浅野 浩子***

By Keiko BABASAKI and Hiroko ASANO

概要

藩末期の町人の日記を用いて外出特性を分析した。主に私事外出に着目し、用事や儀礼、入浴習慣など必要性を伴った外出と、必要性をあまり持たず、生活に楽しみや潤いを持たせる外出(遊び)に分類した。特に「遊び」の外出内容について、目的や利用施設、回遊行動などを調べ、①立寄り回数が多い、②比較的身近な場所で遊びを楽しんでいる、③日常的な参詣や飲食を伴う遊びが多い、④非日常的な遊びは、自然・季節を楽しむ遊びと、寺社での祭りや催事、武家社会の行事の見物に分類される、などの結果が得られた。

1. はじめに

地方都市において、中心市街地空洞化の問題が議論されるようになって久しい。その主な原因はモータリゼーションの進展に伴う市街地の拡大と、郊外の大規模商店の進出により、中心部の集客力が減少したためと考えられる。地方都市中心部の賑わいは、本来は歩いてあらゆる用を足せる利便性にあったといえよう。買物、遊興、飲食等、庶民の「遊び」の場が集積した地区が繁華街として成立していたと考えられる。特に、自動車化以前の日本では移動手段が徒歩に限られ、その範囲内に「遊び」の場を求めていたといえる。

本研究では、中心市街地の「遊び」空間充実の示唆を得るため、近世金沢城下町における町人の外出、特に「遊び」の行動特性や空間特性について考察する。

2. 既存研究の整理

金沢城下町の遊び空間に関する研究として向井¹⁾があげられる。向井は、金沢城下町の都市空間を民俗学の視点から分析し、宗教、政治、商業、遊興の文化空間を図示した。また、19世紀の金沢は、「武家によって作り出された城下町」を「民衆が自分たちの都合に合ったようにうまく使いこなした時代」と述べている⁽¹⁾。丸山²⁾は、名所案内・錦絵・地誌・日記をもとに、藩政期、明治期の名所、年中行事の分析から遊び空間を論じている。特に、名所案内を用いた金沢名所の分析や、日記・地誌を用いた年中行事や芸能・文化など余暇生活の分析を行

い、遊び空間分布を図示している。そこでは多くの遊び空間は「季節と密接な関係をもっており」、「寺社、遊郭、飲食店などが補完的に存在しているのが特徴である」と述べている⁽²⁾。丸山の研究の特徴は、当事の金沢の代表的な遊び空間の分布を示しており、特に遊びの内容が豊富になった明治期の主要な遊びの場が把握されている。

しかし、こうした研究では、花見や芝居見物など金沢で一般に親しまれている名所における遊びを対象としており、自宅からの行き易さ、親しみ易さなど、トリップ距離や地理的要因を考慮した遊び行動の特性を分析したものではない。また、散策など人々の日常的な遊びの研究はなされていない。本研究では、日常の遊び行動について、外出の種類による場所の特性を分析・考察する。

3. 研究の方法

本研究では『梅田日記』³⁾を用いて外出記事を抽出・整理した。若林の解説⁽³⁾によれば、『梅田日記』は、近世末期の金沢城下町の町人梅田甚三久によって書かれた日記で、うち、現存しているものは1864(元治元)年6月から1867(慶応3)年正月までのものである。甚三久の職業は番代手伝といい、農政関係の下級書記官で書類の調整などに携わっていた。日記は私用のものであるが、仕事に関する記事が多く、役所での執務事項、上司である番代や十村たちとの公私にわたる交流が主体となっている。また、住居は、『日記』の内容に「川向に崎田小左衛門様御隣り前田様御長屋燃上り」とあり、浅野川畔の大橋近くに住んでいたと考えられる⁽⁴⁾。

日記の記述は初期の約1年間は詳しいが、それ以降は激減する。本研究では、詳細な記述がされている1864年6月15日から翌年5月18日までの329日間を対象とする。そのうち日記が書かれていた日数は289日である。外出では、金沢城下や郊外への日帰りの外出と、数日間

*keyword: 藩末期、外出行動、遊び

**正会員 博(学) 金沢学院大学美術文化学部文化財学科助教授

***金沢学院大学美術文化学部文化財学科15年度卒業生 (〒920-1390 石川県金沢市末町10)

に及ぶ越中高宮村、山中温泉⁵⁾への旅行があるが、対象を金沢およびその近郊に限定するため、遠方への旅行は分析対象から除外した。外出の記事が書かれている日数は237日あり、うち、旅行期間を除くと215日となる。日記の特性として、必ずしも毎日の行動をすべて記述したものとはいえないが、些細な用事的外出も記載されており、かなり多くの情報を得られるデータと判断した。外出行動をすべて抽出した結果、568件抽出された。

4. 分析結果

(1) 外出目的と外出先施設

外出目的について表1のように分類した。大きく仕事と私事に分けられる。件数の割合は、「仕事(仕事・挨拶)」で208件、37%を占める。仕事は役所や上司宅での仕事であり、仕事上の挨拶は上司への挨拶である。私事で最も多いのは「用事」で99件(17%)、次いで「入浴」57件(10%)、「挨拶」52件(9%)、「娯楽」47件(8%)である。用事の内容は多種多様であるが、私事の用件遂行のために生じた訪問である。私事挨拶については、人との付き合いを目的とした訪問である。娯楽は室内外の遊戯、見物のほか、自然やまちなかの散策が含まれる。また、連れとの待ち合わせや別れの場合、通過地点など、散策途中で記載された地点・町名もひとつの目的地とした。その他、「飲食」で40件、「参詣」が32件、「儀礼」が23件、「買物」が10件みられた。儀礼については冠婚葬

祭の他に組合の寄合も含め、出席が必要とされる訪問とした。参詣に関して、開帳などは寺社の催しであり「娯楽」の見物と区別するため、日記の中で「参詣」と記述があったもののみを別に分類した。入浴の記述は頻繁にあるがほとんど町名の記述がない。買物の件数が少ないが日常の買物の多くは妻の役目と思われる。

用事・挨拶・儀礼は、何らかの用件を達成するためのもの、または人との付き合い上生じた訪問である。私事外出360件中174件と約半数を占めている。特に用事・挨拶は、現代では通信技術やサービス産業の発達により、発生しなくなったものが多い。同様に入浴も住宅構造の変化によりほとんど発生しなくなった。このように、私事外出には、用事や儀礼、生活習慣(入浴)など必要性を伴った外出と、必要性をあまり持たないが生活に楽しみや潤いを持たせるための外出に分けられる。後者の種類の外出が、娯楽、飲食、参詣、(甚三久の)買物であり、これらの目的を改めて「遊び」と定義した。

外出先の施設については(表2)、個人宅が199件(35%)と最も多い。次いで役所127件(22%)、旅館78件(14%)風呂57件(10%)である。目的別にみると、役所はすべて仕事を目的としたものである。また、仕事の挨拶では旅館(97%)、私事の用事や挨拶では個人宅(92%、81%)の割合が高い。儀礼では用件の特性上、個人宅(65%)のほかに寺社(30%)の割合も高い。前述のように、私事の用事・挨拶・儀礼については、用件遂行や付き合いといった対人関係が目的となるため訪問先も個人宅が多い。遊び目的の外出先は、飲食では個人宅50%、飲食店43%、参詣では寺社100%、買物では商店80%と施設に限られる。一方、娯楽は「その他」が34%と最も多く、次いで個人宅(21%)、寺社(21%)、山(15%)である。「その他」は散策や見物、待ち合わせなどの地点や町名であり、施設が限定されていない。

表3に娯楽の内容と利用施設を示す。寺社や武士行事、事件などの「見物・聞物」(23件、49%)と「屋外散策」(17件、36%)、「室内遊戯」(7件、15%)に大別される。

表1 外出目的の分類

目的	内 容	数	%
仕事	仕事	151	26.6
	挨拶	57	10.0
私	用事	99	17.4
	挨拶	52	9.2
	儀礼	23	4.0
	入浴	57	10.0
	風呂		
事	娯楽	47	8.3
	飲食	40	7.0
	参詣	32	5.6
	買物	10	1.8
	買物		
計		568	100

表2 目的別にみた外出先施設

	個人宅	役所	旅館	風呂	寺社	飲食店	商店	山	他	計
仕事	17	127	6						1	151
	%	11.3	84.1	4.0					0.7	100
私	2		55							57
	%	3.5		96.5						100
私	用事	91		5		1		1	1	99
	%	91.9		5.1		1.0		1.0	1.0	100
	挨拶	42		10						52
	%	80.8		19.2						100
	儀礼	15		1		7				23
	%	65.2		4.3		30.4				100
事	入浴			57						57
	%			100						100
	娯楽	10			10		4	7	16	47
	%	21.3			21.3		8.5	14.9	34.0	100
	飲食	20		1		1	17		1	40
私	%	50.0		2.5		2.5	42.5		2.5	100
	参詣					32				32
	%					100				100
	買物	2						8		10
	%	20.0						80.0		100
計		199	127	78	57	51	17	13	8	568
%		35.0	22.4	13.7	10.0	9.0	3.0	2.3	1.4	100

表3 娯楽の内容と外出先施設

内 容	個人宅	寺社	商店	山	他	計	%
見物							
寺社催事(謡、相撲、花摘)		9				9	19.1
事件(火事、処刑等)				6		6	12.8
武士行事(行列、調練等)	1			3		4	8.5
花屋見物・軍談見物			4			4	8.5
屋外散策							
まち散策(町歩き、待合せ)	1	1		6		8	17.0
自然散策(山歩き・眺望等)				6		6	12.8
自然遊戯(茸狩、舟遊び)	1			1	1	3	6.4
室内遊戯(碁、将棋等)	7					7	14.9
計	10	10	4	7	16	47	100

施設との関係で最も多いのは寺社の催事の見物(9件)であり、その他の施設では、個人宅での室内遊戯(7件)、火事・処刑など町なかでの見物(6件)、まちの散策(6件)、山の散策(6件)である。娯楽の特徴として、寺社での催事、自然・季節の楽しみ、町なかでの散策や見物、藩に関係した行事の見物が主な楽しみといえよう。

(2) 立寄り行動

外出特性のひとつの指標として「立寄り回数」を定義した。すなわち立寄り回数1回の場合、自宅と訪問先1箇所との往復である。また一回の外出で複数箇所訪問している場合、その訪問箇所数が立寄り回数となる。自宅から出発して自宅に戻るまでの数としたので、仕事先からの立寄りの場合も自宅からの回数で示している。表4は1回の外出時の立寄り回数である。立寄り回数1回のみが最も多く65%を占め、2回以下の立寄りで88%を占める。

図1は外出目的との関係を示している。立寄り回数は、その目的が含まれる外出の総立寄り回数を示す。立寄り回数1回の割合が半数以上を占めるのは入浴(68%)、仕事(54%)、儀礼(52%)、買物(50%)であり、これらの目的を含む外出では9割以上が3回以下の立寄りである。これは目的のはっきりした外出であり、ついでに立寄るものではないためと考えられる。立寄り回数1回の割合が少ないのは、私事挨拶(21%)、娯楽(23%)、仕事挨拶(26%)、用事(29%)である。挨拶では、一度に複数の上司宿所や知人宅に向かい、用事も外出ついでに個人宅への立寄りが多く、単独の外出とはなにくい。7回以上と特に立寄り回数が多いのは娯楽(28%)、飲食(13%)、参詣(10%)であり、これらは同一の外出の中に含まれているものが多い。

(3) 地理的特性

日記中、外出先について、町名を記したもの、橋上など場所を示したもの、前後の記事から地域が類推できるものを抽出した。また、自宅と役所、寺社の位置を特定した。それ以外の施設は町名は判別できるが位置が特定できないため、町の中心部を代表地点とした。さらに、町名が特定できず地域のみ判別できるデータは、地域別の分析のみで用いている。また、個人宅や旅館については、町名が不明のことが多いこと、対人的な付き合いの要素が強いこと、本研究では遊び目的で利用される施設・場所に注目することから、「遊び」の分析については、個人・旅館を除いたデータ96件(表2の二重線で囲まれたデータ)を用いている。

表4 外出時の立寄り回数

	数	%
1回	232	65.0
2回	82	23.0
3回	21	5.9
4回	13	3.6
5回	4	1.1
6回	2	0.6
7回	1	0.3
8回	1	0.3
10回	1	0.3
計	357	100

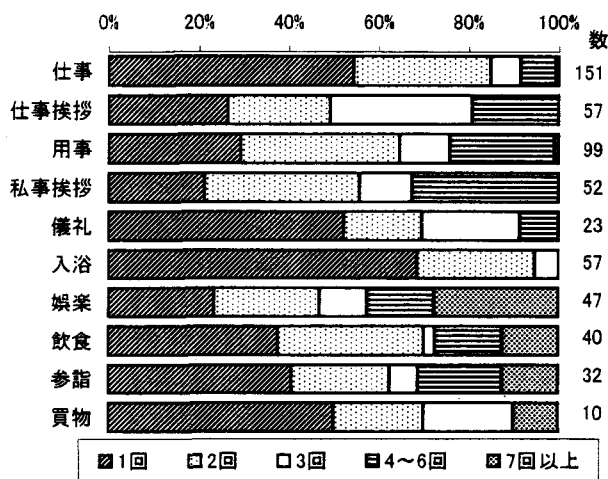


図1 目的別外出時の立寄り回数

a) 私事外出の地域特性

私事外出について判明した町名・位置を図2・表5に示す。両川に挟まれた城下の町について、城を中心に北國街道、石引往還、宮腰往還で4地域に分け、城北、城東、城南、城西とし、さらに浅野川以北(川北)、犀川以南(川南)、郊外を加えた7地域に分類した。私事目的について245件抽出されたが、そのうちの140件(57%)が川北、73件(30%)が城北と、この2地域で9割近くを占める。その中で「遊び」の場合、94件中、川北が60件(64%)、城北が14件(15%)と8割近くが2地域で占められる。すなわち、外出先は自宅近辺に集中しており、浅野川以南でも多くの外出先は北國街道より北側に集中していることになる。北國街道には浅野川大橋と東内総構堀枯木橋に橋番所があり、南部では西外総構堀香林坊橋、犀川大橋でも橋番所を通ることになる⁶⁾。また、街道から路地への入り口には夜間の出入りを禁じる木戸が建てられていた。藩末期ではそれほど制約は厳しくなかったとしても、橋番所・木戸を回避して到達できる地域が選ばれている可能性が考えられる。

b) 遊びの地域特性

表6は「遊び」の目的別地域の分布である。4つの目的とも半数以上の外出先が川北であり、特に参詣では、32件中28件(88%)が浅野川以北に集中している。城北も含めると参詣の97%、買物の86%、飲食の83%を占め、自宅の周辺地域に集中していることを示している。一方、娯楽では城南や川南、郊外に10件(27%)みられ、比較的遠方まで外出しているといえる。

参詣はほとんどが卯辰山周辺に集中しているが、これ

表5 私事外出先地域

	私事	%	遊び	%
川北	140	57.1	60	63.8
城北	73	29.8	14	14.9
城東	10	4.1	7	7.4
城南	8	3.3	4	4.3
城西	2	0.8	1	1.1
川南	10	4.1	7	7.4
郊外	2	0.8	1	1.1
計	245	100	94	100

遊びは個人・旅館を除く

表6 遊びの目的別にみた外出先地域(個人・旅館を除く)

	娯楽	%	飲食	%	参詣	%	買物	%	計	%
川北	19	51.4	9	50.0	28	87.5	4	57.1	60	63.8
城北	4	10.8	6	33.3	3	9.4	2	28.6	15	16.0
城東	4	10.8	1	5.6	1	3.1	1	14.3	7	7.4
城南	4	10.8							4	4.3
城西			1	5.6					1	1.1
川南	5	13.5	1	5.6					6	6.4
郊外	1	2.7							1	1.1
計	37	100	18	100	32	100	7	100	94	100

表7 寺社への外出目的と地域

地域	寺社名	参詣	娯楽	飲食	計
川北	観音院	13	2		15
	来教寺	9			9
	春日社		2		2
	善導寺	1	1		2
	龍国寺	1		1	2
	久保市山乙劔宮	1			1
	即願寺	1			1
	多門天社	1			1
	長谷山市姫宮	1			1
	本然寺		1		1
城北	瓢箪町天満宮	2			2
	西末寺		2		2
	鍛冶町八幡宮	1			1
	東末寺		1		1
城東	田井天満宮	1			1
郊外	大野湊神社		1		1
計		32	10	1	43

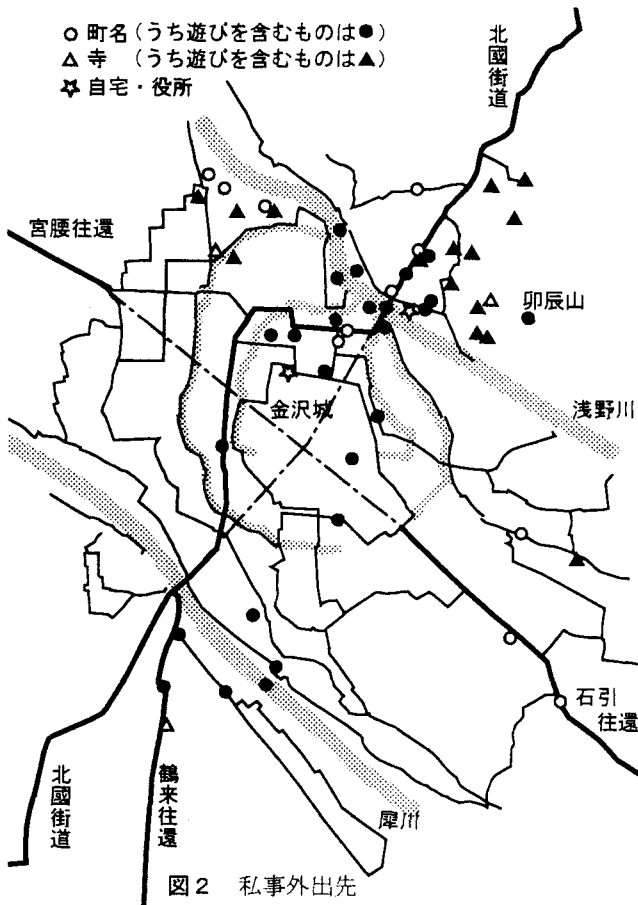


図2 私事外出先

は藩の政策により卯辰山寺院群に真宗以外の寺院を集めたためである。しかし甚三久自身は真宗信者である。また、同様の政策によって集められた犀川以南の寺町寺院群や城東の小立野寺院群への参詣は行われていない。すなわち宗派に関係なく身近の寺社に参詣していることになる。また、飲食では城北の浅野川沿いや卯辰山麓の飲食街を利用することが多い⁽⁷⁾。卯辰山麓では宴会を開き、浅野川沿いでは蕎麦屋を利用しており、10・12・2月の29日には晦日蕎麦を食べに出ている。その他、日記によれば、飲食の多くは仲間と連れ立っての外出が多い。

反対に、娯楽ではかなり遠方まで足を延ばしている。最も多く利用されているのは卯辰山と寺院群がある川北(19件、51%)であるが、その他、城北や城周囲、犀川上流の一文橋、犀川南の寺町近辺まで出かけている。主な内容は、浅野川以北では卯辰山への茸狩りや散策ついで風景見物、近所のタバコ屋での軍談聞物、寺社での謡・相撲見物、火事や処刑者の引き回し・帰城行列見物など、城北では東西末寺の花揃え見物、城東では殺人現場の見物などがある。遠方では城南の本多家(藩重臣)

ののぼり見物や、川南の犀川沿いのごり屋の見物と屋形舟遊覧、藩の調練見物、郊外では能見物などであった。

寺社名の記述があったものについて遊びの目的別に表7に示す。記載されていた寺社は16社あり、ほとんどが川北または城北の寺社である。参詣では観音院と来教寺がそれぞれ13件、9件と特に多い。甚三久は、ほとんど毎月10日に来教寺、18日に観音院に参詣するのを習慣としていた。それ以外の日やその他の寺社への参詣は、開帳や祭礼の場合が多く、家族や友人と連れ立って出かけている。観音院は加賀藩歴代藩主の保護を受けており、卯辰山麓寺院群の代表格の真言宗寺院である。十一面観音を祀り宗派に関係なく参拝者が多かった⁽⁸⁾。また、甚三久の得意とする謡がよく催されている所でもある。来教寺は、金毘羅くじうけが行われており、甚三久も病気の時には妻に行かせるほど熱心であった⁽⁹⁾。庶民にとって参詣は日常的な楽しみといえ、それ故通いやすい寺社が参詣の対象になったといえる。このように浅野川以北の寺社に集中しているのは、参詣が日常的な遊びとされており、橋を渡らず気軽に行くことができ、さらに、魅力的な誘因をもつ寺社が参詣の対象になったといえる。浅野川以南の参詣では、役所の帰りに天満宮(田井、瓢箪町)に参拝したり、友人宅へ寄るついでに参拝がある。

一方、東西末寺の宗派は真宗であるが、娯楽⁽¹⁰⁾の目的地であり、日常的な参詣では訪れていない。「祭り」はあらかじめ決められた日時に行われ人々の参詣を促し、その日になると出店などが並んだ。そうした賑わいを楽しみに訪れる人々も多く、非日常の遊びの場としても利用されていた。卯辰山麓以外の寺院群でも祭りや催事は行われていたであろうが、遠方まで行かずとも自宅近くで行われる種々の催事を楽しんでいたと思われる。

以上のように、寺社への外出は、日常的な参詣と、非日常的な催事の参詣・見物が主な目的であり、庶民の楽しみの場として利用されていた。

c) 外出先距離特性

外出先施設の町名や位置が特定できる記事について自宅からの距離を調べた(図3)。目的地が卯辰山の場合、散策目的が多く場所が特定できないため、データから除いている。私事外出の場合、自宅から目的地までの距離が200~300mの場合が最も多く58件(25%)、次いで300~400mが53件(23%)で、500m以内で173件(76%)を占め、それ以上の距離になると件数が激減している。すべてが自宅を出発地としたトリップではないが、その目的地は自宅から徒歩数分以内の場所が多いことを示している。個人宅を除いた「遊び」では、300~400mが24件(29%)と最も多く、500m以内で51件(62%)を占めるが、一方、1000m以上で16件(19%)、そのうち2000m以上が7件(9%)と遠方の外出もみられる。遊びの目的別の平均距離は、娯楽で1020mと長い、参詣は517m、飲食は503m、買物は378mであった。

d) 回遊行動

娯楽では多くの場所に立寄っている。そこで立寄り回数

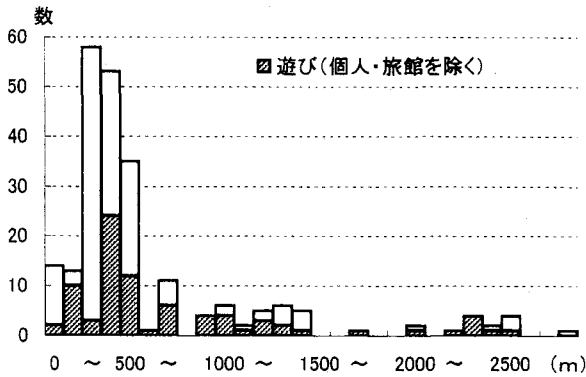


図3 私事目的地の自宅からの距離(山・郊外を除く)

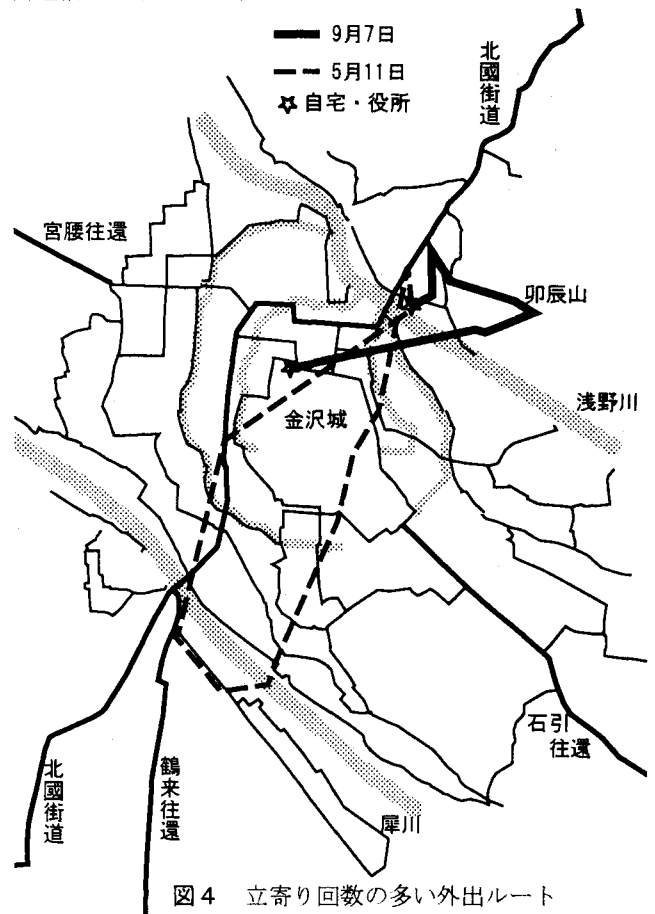
表8 立寄り回数の多い外出記事

時刻	町名	目的地	距離	同伴	目的	詳細	
9月7日 晴、夜風雨							
1	夕方	算用場	720		仕事	仕事	
2		卯辰山麓	観音院	1050	友人1名	参詣	参詣
3		卯辰山麓	市姫宮	20	友人1名	参詣	参詣
4		卯辰山	庚申塚	740	友人1名	娯楽	景色見物
5		卯辰山	一本松	550	友人1名	娯楽	景色見物
6		卯辰山麓	多門天社	320	友人1名	参詣	参詣
7		木町	小料理屋	210	友人1名	飲食	軽食、飲酒
8	愛宕町	小松屋	260	友人1名	飲食	芸者と騒ぐ	
翌2時		自宅	120				
総トリップ距離			3990 m				
5月11日 雨後曇、冷風							
1	15時	森下町	清水屋方	220		娯楽	行列見物
2		味噌蔵町		810	友人3名	娯楽	散策
3		百間堀		270	友人3名	娯楽	散策
4		本多家中		380	友人3名	娯楽	散策
5		犀川上	武家屋敷前	920	友人3名	娯楽	散策
6		一文橋	ごり屋	80	友人2名	娯楽	ごり見物
7		一文橋	ごり屋大池	30		娯楽	屋形舟
8		野田寺町	草花屋	210		娯楽	草花見物
9		寺町	鍋屋	440		飲食	夕飯、飲酒
10		南町	松本屋	1360		飲食	茶菓
0時		自宅	1130				
総トリップ距離			5850 m				

距離は各トリップの起点から終点までの直線距離を示す

数の多い記事2件に着目した(表8)。またそのコースを図4に示す。9月7日は、卯辰山麓の4社で祭礼が行われている時期である。うち3社の参詣を兼ねて、仕事の帰りに友人とともに遊びに出かけている。夕方から参詣や山(庚申塚、一本松)で景色を眺めた後、夜には近所の茶屋で宴会を開き翌2時に帰宅している。近世後期の絵図には一本松の絵が描き込まれており、天保期の『金沢八景』でも挙げられている⁽¹¹⁾。また、庚申塚についても『浅野川八景』の掛物に描かれており、卯辰山頂上の茶臼山にあった庚申堂の名残りという⁽¹²⁾。名所見物や祭礼時の参詣は庶民の娯楽の定番であったと考えられる。それぞれの目的地間の距離を求め、外出の総距離を概算した。その結果、朝に自宅から役所を経由して自宅に戻るまでの距離は3270m、夕方に役所から出発して自宅までの距離だけをみると2550mである。

5月11日は最も遠くまで行楽に出かけた事例である。城の東側から南下し、城西側を通して帰宅している。内容をみると、15時頃に近所の知人宅で藩主の帰城行列を見物した後、友人と連れ立って犀川上流まで出かけている。途中、味噌蔵町(武家地)、百間堀(城周囲)、本多家中を通り、犀川上の武家屋敷前で一人と別れている。これらの地点は通過地点としての記述のみである。北國街道を通らず城東を歩いており、武家地や城近辺も回遊ルートとして使われていることになる。犀川では大橋上流の一文橋を渡り、近辺のgori屋見物、屋形舟を楽しみ、花屋見物などしながら最後は料理屋で一杯酌み交わし、街道沿いの南町で茶菓をとった後、0時に帰宅している。



総トリップ距離は約 5850m となり、実際の道のりを考えるとかなり遠方まで遊び歩いたことになる。甚三久の 1 年間の私事外出で犀川以南の記事はこれ以外に調練見物と寺院での法要のみである。さらに能見物と帰りに寄った風呂以外に郊外にも出ていない。ほとんどの外出先は日常の徒歩圏内に限られているといえる。

e) 遊びの特性まとめ

遊びには、催事の見物と自然・季節を楽しむ遊び、町並み・賑わいを見て楽しむ遊びがあったといえる。主な目的は、茸狩りなど「自然との関わり」、「寺社の参詣や催し」、調練や行列など「武士社会の行事」の見物であり、付随する遊びとして自然や町並み見物など散策を楽しみながら歩き回り、最後には飲食店で宴会を楽しんでいた。また、甚三久は主に自宅周辺の徒歩圏内で遊びを楽しんでいたといえる。これは、彼の住む卯辰山麓界隈が、催事が多く行われる寺社や自然を楽しむ卯辰山、宴会を楽しむ盛り場など、遊びの場が集積していた地域といえ、金沢城下町における総合的な遊び空間として賑わっていたと考えられる。その賑わいの中心は寺社であった。近世の人々は信仰深く日常的に参詣している。また、寺社は様々な遊びの場を提供してくれる。寺社に訪れる人々が増えたとその周辺に商店や飲食店が集まり、いっそうの賑わい空間が形成されることになる。近世城下町において、寺院群として寺社を集めたのは、前田藩による防衛策であったが、その結果、人々に遊びの場を提供することとなった。金沢城下町における寺社を中心とする賑わい空間は、防衛策の副産物であったともいえよう。

4. まとめ

本研究では、藩末期の町人の日記を用いて近世城下町における庶民の外出特性、特に遊びの行動特性や空間特性を分析した。主な結果を以下に示す。

- ① 私事外出には、用事や儀礼、入浴習慣など必要性を伴った外出と、必要性をあまり持たず生活に楽しみや潤いを持たせる外出がある。後者を「遊び」と定義した。
- ② 私事外出の多くは、用件遂行あるいは人との付き合い上生じた個人宅への訪問が多く、現代では通信・サービス産業の台頭により発生しないトリップが多い。
- ③ 1 回の外出時の立寄り回数は、入浴、儀礼、買物のような目的のはっきりした外出では少ないが、用事による個人宅への立寄りや、外出ついでに立寄る場合が多い。遊び目的では、何箇所にも立寄っている。
- ④ 参詣、飲食、買物など遊びの多くは自宅近辺を外出先としており、比較的身近な場所で遊びを楽しんでいる。娯楽では遠くまで出かけることがある。
- ⑤ 遊びの目的地は、距離と川や橋など地形・社会的な境界の影響を受ける傾向がある。
- ⑥ 遊びには、日常的な参詣や飲食を伴うことが多い。
- ⑦ 非日常的な遊びでは、自然・季節を楽しむ遊びと、寺社での祭り・催事を楽しむ遊び、武士社会の行事の見物などがある。

寺社は様々な遊びが提供された施設であり、その周辺では寺社で得られない遊びを提供し、卯辰山麓一帯が総合的な遊び空間として成立していたといえる。現代、寺社は日常的に訪れる対象ではなくなってしまった。さらに、モータリゼーションの進展に伴い、集客力の大きな施設は郊外に移転し、総合的な遊び空間は郊外のレジャーセンター、ショッピングセンターに代わってしまった。現在の中心市街地に残る遊びは非日常的な買物・飲食と休日の催事が主体である。しかし、非日常的な遊びには集客の確実性が低く、常態的な賑わいを得ることは難しい。近世の参詣に代わる日常的な遊び、郊外では得られない種類の遊びを提供できる場が必要である。

〔参考文献〕

- 1) 金沢民俗をさぐる会編著、『都市の民俗・金沢』、向井英明、「第一章 伝統都市の民俗空間」、国書刊行会、pp.1-30、1984
- 2) 川上・丸山・永山編著、『21 世紀へのプロローグ まちづくりの戦略』、丸山敦「遊び」空間の歴史の変遷、山海堂、pp.49-64、1994
- 3) 若林喜三郎編、『梅田日記』、北国出版社、1970
- 4) 田中喜男、『城下町金沢』、日本書院、1966
- 5) 本岡三郎、『金沢という街』、金沢実業会、1959
- 6) 八田健一、『百万石太平記』、石川県図書館協会、1964
- 7) 『日本海文化叢書第 1 巻、加越能寺社由来上巻』、石川県図書館協会、1975
- 8) 高室信一、『金沢・町物語』、能登印刷、1982
- 9) 『古絵図探訪』能登印刷、2002

〔注〕

- (1) 文献 1) pp.28-29
- (2) 文献 2) p.53
- (3) 文献 3) 解説 pp.11-46
- (4) 文献 3) 本文 p.30、9 月 20 日の記事。若林の解説 p.12 の解釈に従った。
- (5) 文献 3) 10 月 8 日～10 月 18 日 (p.36)、2 月 3 日～2 月 12 日 (pp.84-91)、3 月 29 日～4 月 3 日 (pp.128-135)
- (6) 文献 4) pp.28-32
- (7) 例えば、文献 4) pp.53-56、文献 5) p.70,76-78 では当社の遊郭・色里に関連して、文献 6) pp.63-67 では幕末の料理屋に関連して浅野川周辺の飲食街の記述がある。
- (8) 文献 7) p.22、119、文献 8) p.34。また、来教寺は文献 7) p.20 によれば天台律宗。
- (9) 文献 3) p.51、11 月 22 日の記事。
- (10) 文献 3) p.10、「西東両末寺御花揃為見物」とあり、「参詣」の記述はない。
- (11) 文献 1) p.52、文献 6) p.91、また、文献 9) 収録の『金府大絵図』でその位置が確認できる。
- (12) 文献 5) p.62